

清、雖案牘成堆、庶務猥積、而飲酒之興、不曾休廢、醉後彌明、割斷如流、故吏民不敢欺之、

〔大鏡<sup>五</sup>

太政大臣爲光〕太政大臣爲光のおとゞ、

略

○中 男君太郎は、左衛門督さねのぶときこえさせし、

略 ○中 いみじき上。ごにてぞおはせし、この關白殿藤原のひととせの臨時客に、あまりゑひて、御

座にゐながらたちもあへ給はで、ものつき給へるにこそ、かう名のもろたかがかきたる樂府の御屏風に、かゝりてそなはれたれ、

〔大鏡<sup>六</sup>

内大臣道隆〕このおとゞ、これ東三條おとゞ、

兼家

藤原の一男なり、御母は女院の同腹也、關白に

なりさかへ給ひて、六年ばかりやおはしましたしけん、大疫癘の年にてうせさせ給へしが、されどもそのやまひにはあらで、御みきのみだれさせ給ひにしなり、おのこは上。戸ひとつの興の事にすれど、過ぬるはいと不便なるおりはべりや、祭のかへさ御らんずとて、小一條大將藤原 閑院大

將藤原

朝光

原と一御車にて、紫野に出させたまひぬ、鳥のついゐたるかたをかめにつくらせ給ひて、

興あるものにおぼして、ともすればおほみきいれてめす、今日もそれにてまいらする、もてはやさせ給ふほどに、あまりやう／＼すぎさせ給ひて後は、御車のしりくちのすだれみなあげて、三所ながら御もとゞりはなちておはしましたしけるは、いとゞ見ぐるしかりけりな、おほかたこの大

將殿達のまいり給へる、尋常にて出給ふをば、いとほいなく口おしき、事におぼしめしたりけり、ものもおぼえず御装束もひきみだりて、御車さしよせつゝ、人にかゝりて乗給ふをぞ、いと興ある事にせさせ給ひける、但この酔のほどよりはとくさむることをぞせさせ給ひし、御賀茂詣日は、社頭にて三度の御かはらけ、空にてまいらするわざなるを、その御時には禰宜神主も心えて、

大かはらけをぞまいらせしに、三度はさらなる事にて、七八度などめして、上社にまいり給ふ道にては、やがてのけ、ざまにしりのかたを御まくらにて、不覺におほとのごもりぬ、一の大納言に

ては、この御堂藤原

道長

ぞおはしましたし、かば、御らんずるに、夜に入ぬれば、御前の松のひかりにと